資料４－１

平成２３年２月２１日

静岡県
交通基盤部都市局長
中井　淳一殿

ふれっしゅ沼津
代表　植松　正
原貨物駅に土地を売らない地権者の会
代表　殿岡　利治

公開質問状

今般、平成２３年２月９日付けで、貴職より、ふれっしゅ沼津、および、原貨物駅に土地を売らない地権者の会宛てに書面が届き、「県から（沼津駅付近鉄道高架事業に関する有識者会議の）各委員に対し、皆様からの公開質問状に対する回答は不要である旨連絡いたしましたので、御承知おきください」と記されておりました。

私どもは、このような貴職からの筋違いの連絡に当惑するとともに、貴職の対応を理解することが出来ません。そこで、ここに公開質問状の形をとらせていただく次第です。

質問１

私どもの１月２６日付け「公開質問状」は、１０名の委員宛てに郵送したものであり、貴職は介入するお立場にないと理解しております。

にもかかわらず、各委員に「回答は不要」と指示して返信を妨害し、返答を封じたことは、委員の方々に対して、誠に失礼な行為だと考えます。さらに、静岡県民にとって切実な質問を、「外部の方の主張」（１月２６日声明）「皆様の御主張」（２月９日書面）と「質問」を「主張」と意図的にすりかえ封じ込める姿勢は、静岡県の標榜する「開かれた県政」に反する行為であり、県政への県民の信頼を害なう対応であるように思えます。

私どもの「公開質問状」に対する、先般の「遺憾声明」、今般の「回答不要文書」と、貴職の過敏で異常に思える対応の理由をお聞かせ下さい。

質問２

川勝平太知事は、平成２２年８月２４日の有識者会議に関わる定例記者会見で、「必要に応じて、地元の意見を聞く場を設けてもらうことも問題ない」と発言されております。

知事の発言趣旨にそって、有識者会議に「地元の意見を聞く場」を設ける御意向はありますか？　その計画がない場合は、その理由をお聞かせ下さい。

質問３

報道によれば、「（有識者会議では）反対グループが主張する、（沼津駅の）橋上駅化との比較も行なう」（平成２２年９月９日静岡新聞朝刊）とされています。

今後、事業費、工期、投資対効果等「橋上駅化と高架化の比較」の予定はありますか？

以上３点、２月２８日迄に、文書をもって御回答下さるようお願い申し上げます。

資料４－２

平成２３年２月２１日

沼津駅付近鉄道高架事業に関する
有識者会議　委員各位

ふれっしゅ沼津
代表　植松　正
原貨物駅に土地を売らない地権者の会
代表　殿岡　利治

前略　御高免下さい。

先般、１月２６日付けで「第３回有識者会議」についての公開質問状を郵送させていただき、先生方からの御回答をお待ちしていましたところ、２月９日付けで、中井淳一交通基盤部都市局長名の「各委員に対し公開質問状に対する回答は不要である旨連絡しましたので、御承知おきください」という文書が届きました。

私どもは、県当局の対応は筋違いであり、委員の皆様に対し「回答不要」を指示するなど誠に失礼な行為であると考えます。

さて、本日、都市局長に、３点について公開質問状を提出したところですが、委員の先生方にも、下記の通り３点、追加質問させていただきます。

追加質問１

川勝平太知事は、平成２２年８月２４日の有識者会議に関わる定例記者会見で、「必要に応じて、地元の意見を聞く場を設けてもらうことも問題ない」と発言されております。

知事の発言趣旨にそって、有識者会議に「地元の意見を聞く場」を設ける御意向はありますか？　その計画がない場合は、その理由をお聞かせ下さい。

追加質問２

報道によれば、「（有識者会議では）反対グループが主張する、（沼津駅の）橋上駅化との比較も行なう」（平成２２年９月９日、静岡新聞朝刊）とされています。

今後、事業費、工期、投資対効果等「橋上駅化と高架化の比較」の予定がありますか？

追加質問３

第３回会議の最後に、森地座長から「予定では次回のテーマは地域振興となっているが、現計画の貨物駅移転先の妥当性については他の選択枝を含めて、もう少し議論する必要がある」旨の発言がありました。また、武内委員の「貨物基地歓迎論」を受けて、座長は「物流基地の周辺には、物流、金融、情報などの産業が集積して都心を形成している」とし、「物流の視点から、貨物駅の存在は地域の振興にメリットがある」との持論を述べられました。とするならば、「沼津市中心市街地の活性化のためには、貨物駅は移転ではなく現状維持」という結論になります。

「貨物駅＝歓迎施設論」「貨物駅＝地域振興論」「貨物駅用地の妥当性」についてどのような御意見をおもちでしょうか？

先般の質問状への御回答の返送希望日（２月１５日）は過ぎましたが、先般の質問とあわせて御回答下さるようお願い申し上げます。２月末日迄の返送をお待ちしております。

JR貨物駅の移転用地は歴史的景勝の地です。

資料4－3

浮島が原から堂々たる富士を望む

原（はら）

桃里あたりから広重は描きました

駿河国駿東郡

静岡県沼津市
最寄駅：JR原駅

日本橋から：123.8km

名物・名産：うなぎの蒲焼き、白酒

本陣：1軒
脇本陣：0軒
旅籠屋：25軒

名勝第1位の眺め

沼津宿を越えた後の東海道は、ひたすら直進する起伏のない一本道が続く。その途中に位置する、五十三次の中でも最も小さな宿場町の一つが、13番目の宿・原であった。

「原」という地名は、かつてこの地域を覆っていた、「浮島が原」と呼ばれる広大な湿地帯に由来する。この湿地帯は農作業に不向きであり、洪水や海水の逆流による水害も多く、地元住民をしばしば苦しめた。

一方で、広大な湿地帯の向こうにそびえる富士の姿は、往来する旅人を喜ばせた。次の吉原宿へ向かう途中には、百人一首に登場する田子の浦の海岸もある。伊勢出身の放浪の俳人・大淀三千風（おおよどみちかぜ）が1690（元禄3）年に発行した『日本行脚集』の中では、日本の名勝ランキング（本朝十二景）の第1位として、田子の浦から望む富士が挙げられている。旅人たちは、名物のうなぎに舌鼓を打ちながら、見事な眺望に旅の疲れを癒したのだろう。

広重「五十三次名所図会 吉原」
浮島が原での漁猟の様子。こちらの富士も雄大だ。

原「朝之富士」 画面の枠さえつきでた、雄々たる富士。手前の浮島が原では鶴が餌をついばむ。

新星出版社刊『東海道五十三次』より

歴史談話

忠臣蔵「道行旅路の花嫁」

雪化粧の富士を見上げる、供を従えた2人連れの女。広重絵の中の旅人は、歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』の八段目、「道行旅路の花嫁」の登場人物に見立てられた人物だ。

若いほうの女は、大星由良之助（大石内蔵助がモデル）の嫡男・力弥の許嫁だった小浪で、もう1人は加古川本蔵の妻であり小浪の義理の母の戸無瀬。戸無瀬は、忠臣蔵の事件で婚約者と引き裂かれた義娘を不憫に思い、2人で大星親子の隠遁先であった京の山科へと向かうのである。『忠臣蔵』の浮世絵でも知られる広重ならではの遊び心だといえるだろう。

舞台絵？